

ミステリ読書案内

2019. 12. 10 発行元

第10号 伊藤 剛

探偵小説専門誌「幻影城」特集

時間の流れとともに多くの人の記憶から薄れて行ってしまうものがある。探偵小説専門誌『幻影城』という月刊雑誌も過去のものになりつつあるのかもしれない。でも、私自身は『幻影城』に育てられたという思いが強い。伝えていくべきものだなあと感じている今日このごろである。

「幻影城」とは？

今から44年前の1975年の2月号からスタートした月刊の探偵小説専門誌。当時は、各種の小説を集めた、いわゆる「中間誌」はたくさんあったものの、ミステリ、特に日本のコチコチの探偵小説を専門に取り扱う雑誌はなかった。

やはり、編集長だった島崎博氏の功績が大きかった。私財を投入しての雑誌作りの熱意は並大抵ではなかったと思う。

1979年の1月号が「50号記念特大号」で、これを出した後、続かなくなった。3ヶ月休刊した後、5月号・6月号・7月号と3巻出して終了。熱心なファンがついていたのだが、出版社の経営は難しかったのだと思う。

創刊号から53号まで

創刊号の表紙を載せたいと思っただが、著作権のかかわりがあるのでやめにした。昨年、2冊友人から譲られ、全巻揃いになった。

月刊誌として53冊。別冊として

出したものが16冊。それに幻影城ノベルスなどの形での単行本を20冊ぐらい。これぐらいの出版物がある。

雑誌の部分については、ネット上にもよく売りに出ている、現在、1冊500円から1000円ぐらいの値で取引されているようだ。

「幻影城新人賞」について

『幻影城』の果たした大きな役割のひとつに「新人賞」の創設がある。創刊されたその年からすぐに募集が開始されている。

1977年の1月号が第2回新人賞の評論部門の発表号である。前号に書いたように、私の名前と選評が載っている。時々手にしてみるが、悔しい思い出の一冊と言ったところか。

幻影城新人賞から出発した作家は、泡坂妻夫、栗本薫、連城三紀彦、田中芳樹などをはじめとしてたくさんいる。ただ、ここでは書くスペースがないので、別の号で紹介することにする。

「探偵小説」の紹介と復活

島崎編集長の願いは、明治時代から育んできた日本の「探偵小説」を再び日の当たるところに置いて紹介したいということと、新たな「探偵小説」がこの雑誌から生まれることだったろうと思う。

別冊幻影城のシリーズには、黒岩涙香の号もある。当時は、日本の探偵小説の生みの親・涙香の小説を手に入れることはなかなか難しかったのだ。

幻影城/ベルスでの挑戦

『幻影城』出版では、途中から、新作書き下ろしを単行本で出版し始めた。手元にある天藤真の『炎の背景』。帯にも印刷してあるとおり「アンカット・フランス装」である。…と言っても通じないか…。製本作業の最後の裁断を省略した半完成品。袋綴じになっているので、ペーパーナイフでページを切り開きながら読み進むことになる。

私の幻影城版『炎の背景』は未開封である。まだ袋になったまま。まあ、記念品みたいなもの。実際には、数年後に角川文庫から出たものの方を読んだ。

この『幻影城』の試みは、乱丁本と勘違いした書店、読者の続出によって、返品の手となり失敗となってしまった。残念、残念。

海外ミステリ この1冊・連載6

ジョセフィン・テイ 『時の娘』

裏表紙の紹介に「探偵小説史上の燦然と輝く歴史ミステリ。不朽の名作！」と書いてある。私の持っている本は、ハヤカワ・ポケット・ミステリの114番。ただし、小泉喜美子による改訳決定版で、最初の初版ではない。元の初版は、原書が出た翌年の1953年に出ている。

このテイの『時の娘』は歴史ミステリの名作と言っても、歴史上の人物が主人公・登場人物になって過去の場面で推理するとかの形式ではなく、現代の人が、歴史上の問題について、たくさんの資料を土台にして、いろいろな角度から検証、考証する形になっているものである。アームチェア・ディテクティブのひとつであると言ってもよい。日本のミステリでも何作か同じ様な例がある。「真理は時の娘」～古い諺。15世紀のイギリス。薔薇戦争の時代、英国史上最大の悪役リチャード三世の真実の姿を探し求めるというストーリーになっている。もちろん、小説の仕立てになっているわけで、大きな動きがない分、腰を据えてじっくり読み味わうことになる。テイの他の作品としては『フランチャイズ事件』（ポケ・ミス138番）が私の手元にある。